

サルにおける大腸憩室症の疫学的研究

岸本真弓・和 秀雄（日獣畜大・獣）

大腸憩室症はヒトにおいて近年増加し注目されている疾病であるが、サル類における本症についての報告は少なくその発生状況については全く明らかにされていない。本研究の目的は貴研究所々有のサルについて可能な限り数多く検査し、大腸憩室症の発生状況を調べることにある。

昭和63年度中にニホンザル61頭について麻酔下で二重造影法による大腸X線検査を行なった。その内訳はオス31頭、メス30頭、年令5才以下6頭、6～10才25頭、11～15才15頭、16～20才13頭、20才以上2頭、飼育年数については5年以下19頭、6～10年27頭、11～15年12頭、16～20年3頭であった。このうち3頭に大腸憩室が存在することがわかった。その3頭は①オス・18才・飼育年数15年、②メス・17才・飼育年数10年および③オス・17才・飼育年数9年であった。このことは老令の個体、飼育年数の長い個体において発見頻度が高まるという可能性を示唆するが、今後一層例数をふやすことが必要であると考え。また、液浸標本による疫学調査、組織学的検索などを含む他の方面からの検討も加えていく必要があると考え。

白山のニホンザルの積雪地への生態的・形態的適応

水野昭憲（石川県白山自然保護センター）
滝澤 均（富山市ファミリーパーク公社）

白山地域は、霊長類の分布地としては、世界でもきわだった多雪地といえる。冬期間ニホンザルが遊動する標高400mから800mでも、最深積雪は2mから5mになり、積雪期間は約5か月に及ぶ。このような雪は、ニホンザルに寒冷と食物不足への対応を強いている。1988年11月に実施した白山カムリA群の捕獲調査を機会に、多雪への適応にかかわりのあるいくつかの項目について調査した。

1) 冬の遊動域

1988年11月から1989年3月まで、手取川流域の野生群、12群について、群れ構成を確認し、移動を追跡した。

近年、個体数が増加し、冬の遊動域が下流方向へ広がる傾向にある。この冬にはタイコA1群が

初めて手取川を渡り、鳥越村へ移動した。急に遊動域を広げたのは、秋の木の実の不作と、早い初雪のため、サルが人家や畑の柿を求めて来るようになったためと見られる。1965年以降現在までに約10kmの低山方向への分布域の拡大が見られた。

2) 体重の変化

11月に、カムリA群の26頭を捕獲、生体計測をした。体重は平均でアカンボウ2.0kg、1歳4.1kg、3歳7.5kg、オトナメス13.2kgであった。その後1、2、3月に再度体重を測定した。アカンボウではほとんど変化がなく、オトナメスで1.8～3.6kgの体重減少がみられた。この冬は、稀にみる暖冬であったが、それでも過去の豪雪年に測定したものと同程度の減少があった。この群れは夏にだけ餌付けをし、冬には全く給餌していないので、この体重変化は、野生状態のニホンザルのものを示していると考えられる。

3) 冬の死亡

白山のニホンザルでは、大雪の年にアカンボウの高い死亡率がみられる。1987、88、89年と、比較的雪の少ない年が続いたので、アカンボウの死亡はなかった。1983年以降6年間のアカンボウの生存率は、29、29、36、100、100、100%、群れのオトナメス全体に対して1歳まで生存したコードモの割合は、11、8、15、25、62、36%であった。

霊長類の心臓、副腎および眼球付属器における生理活性物質の局在——免疫組織化学による解析

上田秀一・田辺稔邦（京都府立医大・解剖）

霊長類の副腎、眼球および眼球付属器（涙腺）における生理活性物質（アミン、ペプチド）および生合成酵素（チロシン水酸化酵素）の組織内局在を明らかにする目的で、ニホンザルの副腎、網膜および涙腺を免疫組織化学的に検索した。

霊長類研究所にて、ニホンザル（2匹）を麻酔下により実験殺を行った。実験殺後、開胸し、左心室より生理食塩水による前灌流さらに4%パラホルムアルデヒド、0.2%ピクリン酸を含むリン酸緩衝液（pH7.6）にて灌流固定を行った。副腎、眼球および涙腺を摘出し、同固定液にて後固定、サッカロース浸漬後、クリオスタットにて薄切し、浮遊切片のまま免疫染色を施した。また切片の一